

**仲間とともに運動に親しむ子どもを育てる体育学習
～豊かな吟味を生む支援のあり方～**

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

学校教育における体育学習の役割は、仲間とともに運動に親しもうとする姿勢を育てることである。そのためには、運動種目の技能や戦術はもちろんのこと、ルールやマナー、場の工夫や仲間とのかかわりといった体育の学習内容を学ばせることで運動の特性に触れ、生涯を通じて運動に親しもうとする子どもを育てられると考えている。

そのためには、対象（運動種目）・他者（仲間）・自己との対話の三位一体の活動の中で、子どもたちが、運動の特性に迫る豊かな吟味をすることが大切であると考えている。

(2) 体育科でめざす子ども像

本校の子どもたちの実態を見てみると、ほとんどの子どもは、体を動かすことが大好きで、スポレク附属（運動会）やおく山まつりでのダンスを楽しんだり、休み時間に積極的に外に出てボール遊びや鬼ごっこ等で仲間と楽しく遊んだりすることができる。

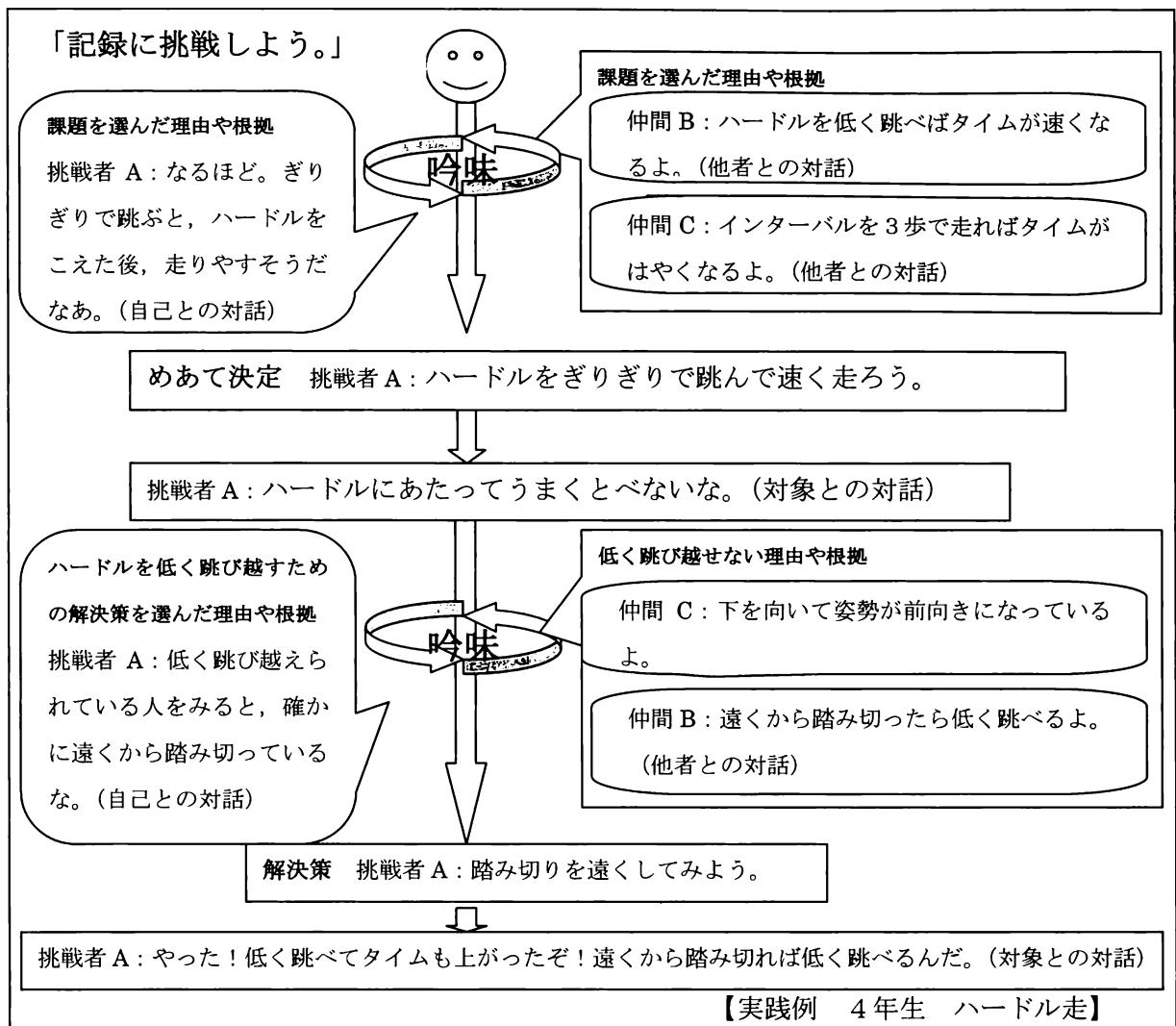
しかし、一方では、運動経験が豊富な子の中に、自分勝手なプレイをしたり、仲間に不満を言ったりして一緒に楽しめない子どもがいる。また、運動がうまくできないため有能感が得られず、いくら練習をしてもできるようにならない「自分には無理だ。」という無力感が逆に形成されている子がいる。「失敗したら、何か言われそうだ。」と先生や仲間から低い評価を受ける不安が生じているために運動に消極的な子がいる。これらは、運動の特性に触れ、仲間とかがわる楽しさを十分味わうことができていないことが原因だと考えられる。

体育の授業では、子どもたちに、「今持っている力」で運動を楽しむ段階から学習をスタートし、自発的な創意や工夫を重ねつつ、より高まった力で運動を楽しむという段階へ発展していく学習をしていく。その中で、進んで運動に参加し、仲間とともに運動を楽しめる子どもを育てていきたい。そして、こうした運動に親しむ姿勢は、生涯にわたって必要な体力の維持につながると考えている。

2. 体育学習における「学びの質の高まり」

体育学習における「学びの質の高まり」とは、対象（運動種目）・他者（仲間）・自己（子ども自身）と対話することで成熟していく三位一体の活動であると捉えている。この3つの対話の中で、自己は、対象（運動種目）への理由や根拠を表出し、同様に、他者の思いや考えを聞き互いに比較検討し合い解決策の吟味をすることから新たな気づき生まれ、自己を更新していくことだと考えている。この過程が、繰り返されることで運動の本質・真理や価値に迫ることができ、運動に親しもうとする姿勢が育つと考えている（実践例 4年生 ハードル走 参照）。

この吟味が特性にせまる豊かなものになるためには、みとりと支援が重要であると考えている。



3. 研究の展望

豊かな吟味を生み出し、質の高い学びをめざすために、以下のようなことを大切に研究を進めていきたい。

- 子どもの適時性やこれまでの学習経験を考慮に入れて、「子どもたちが今持っている力」で楽しめるような対象との出合わせ方。(単元構成, ルール, 場の設定, グループづくり, 教具)
- 豊かな吟味を導くためのみとりと支援の仕方。

4. 研究の評価

授業者の主観のみでなく、結果を裏付ける客観的なデータ(学習カード, デジカメ, ビデオでの子どもの活動記録など)を用いて、対象との出合わせ方や支援の仕方が適切であったかについて、研究の評価を行っていきたい。

参考文献

- 1) 鈴木秀人『小学校の体育授業づくり入門』 学文社(2009)
- 2) 松田岩男・宇土正彦『学校体育用語辞典』 大修館書店(2001)